

## 受賞によせて

西崎伸子

エチオピアの大地を踏んでから今年でちょうど10年が経った。青年海外協力隊の隊員として渡航する以前は、大型の野生動物が暮らす雄大な自然を見てみたいというアフリカに対するステレオタイプのイメージしかもっていなかったが、野生動物の保護区で2年間働く間に、野生動物の保護をめぐって生じているさまざまな問題に研究者として取り組みたいと思うようになった。その問題とは、単純に言ってしまえば、野生動物の保護区の現場では、人間の手が加わらない原生的な自然環境を保全しようとする保護区を管理する側と、保護区として囲い込まれる自然資源の所有と利用を主張する地域住民が深刻に対立しているということだ。私の関心は、野生動物そのものから、野生動物と同じ空間に暮らす人々による日々の営みへと移った。現在の研究テーマである「野生動物の保護政策と地域住民の関係」はそのとき以来変わっていない。しかし、問題のとらえ方は少しずつ変わってきた。

大学院に入り、エチオピアでの調査に本格的にとりくみ始めた当初は、上記のように、保護区を管理する側対地域住民という単純な対立的図式として問題をとらえていた。また、両者の直接的な関係を見るために、フォーマルにおこなわれる交渉ばかりを追いかけしており、人類学を志す者ならば真っ先におこなうはずの、人々の日々の生活にどっぷりと漬かるという大事な作業を怠っていた。しかし、フィールドワークを何度か繰り返し、持ち帰ったデータを観照し、さまざまな人と議論するなかで徐々に、保護区を管理する側と地域住民をともに一枚岩ととらえたり、保護か利用かといった二項対立的な問いかけをしたりするのではなく、野生動物の保護や利用に関する個人や集団の行動をつぶさに観察することが必要であると思うようになった。今回受賞の対象となった論文では、そのことを念頭におきながら、エチオピア西南部に位置するマゴ国立公園で延べ1年間かけておこなったフィールドワークの成果を提示したものである。

とはいうものの、国立公園などの保護区の周辺では、その存在や管理のあり方をめぐって問題が頻発しており、こちらが想定したように調査を円滑に進められたわけではない。「村人をどう教育すればいいのか聞かせてくれ」と公園を管理する側のスタッフから意見を求められたり、「おまえは公園のスタッフなのか」と住民から詰問されたりすることが多々あった。「まずは調査をさせてください」というのが私の本音だが、人々は「調査のさらに先」にあるものを知りたがる。調査をされる側にとっては当然の要求なのだが、わたしはいつも返答に窮していた。

しかし、このように国立公園と地域住民の間で右往左往しているのは私に限らず、スカウトとよばれる公園で働くスタッフも同じであった。国立公園には、学歴の高い管理官長をはじめとする事務に携わる人たちと、専らフィールドで活動するスカウトと呼ばれる人たちが働いている。わたしは、地元から雇用されているスカウトの一人と仲良くなり、公園に隣接する村で調査をするときには彼の家族と一緒に生活するようになった。スカウトの家族と共に生活し行動することが地域住民を対象にした調査になんらかの支障を来すのではないかと危惧していたが、その多くは杞憂に終わった。村に家族を置いて、大半の時間を公園の中で過ごすスカウトは、国立公園が現在置かれている困難な状況を端的に示す存在であったからだ。同時に、彼らと共に行動するうちに、公園で働く人々の仕事が非常にリスクに満ちあふれたものであることを知るようになった。

受賞対象の論文のもとになるデータを収集して帰国した直後、大学院の研究仲間でありフィールドを近くにもつ金子守恵さんから、当時のマゴ国立公園の管理官長であるシャニフェ氏が地元住民に殺されたこと、ジンカという近隣の町がこの事件で大変な騒ぎになっていることを聞いた。その衝撃的なニュースを聞いてから1週間ほど、夢の中に彼が殺される場面が現れ、真冬にもかかわらず汗をかいては起きる日々



受賞者の西崎伸子氏  
と賞贈呈の福井勝義  
会長（当時）

が続いた。彼が亡くなったことにショックを受けたのと同時に、私もこの事件に巻き込まれたかもしれないという、言いようのない恐怖感に襲われたからだ。事件が起こった半年後に公園を再訪した私は、事件の顛末をスカウトから聞くことができた。以下にその一部を記す。

事の発端は、スカウトが数人で密猟を取り締まるために公園内でパトロールをしていたことにある。このとき、A村の数人が、アフリカスイギュウを狩猟しに公園内にきていた。スカウトに遭遇した村人が最初に発砲してきたので、スカウトは応戦し、しばしの銃撃戦となった。その後、現場においてA村出身のスカウトのG氏が、同郷の「密猟者」と話し合うことを試みたがうまくいかず、彼は逆にひどく殴られて瀕死の重傷を負った状態で「密猟者」に村に連れ去られてしまった。その事件の翌日にシャニフェ氏はG氏を病院に連れていくために引渡しを求めてA村に向かったのである。この日、シャニフェ氏と数人のスカウトがA村に向かっているという情報は、彼らが到着する以前にすでに村人の耳に届いていた。村に通ずる道路の数カ所が木の枝を用いて封鎖されていたという。この地域の慣習を知る同行したスカウトたちは、これが地域住民からの警告であることを察してシャニフェ氏に引き返すように忠告したが、彼は村に入ることを望んだ。そして、村に入った途端に住民と押し問答になり、自動小銃が発砲されたというのだ。スカウトのG氏、同行した運転手、他のスカウトに危害は加えられなかった。シャニフェ氏だけが標的になったのである。

事件が起きるほんの1カ月前までわたしはマゴ国立公園でフィールドワークをしており、シャニフェ氏やスカウトに対して、公園管理の実態を知りたいので周辺の村に行くときにはできるかぎり同行させてほしいと頼んでいた。彼らは私の申し出を受け入れて、近隣の村に行くときには公園が所有する車の荷台に乗せてくれた。事件がおこったときに滞在していたら、必ずと断言していた、わたしはシャニフェ氏と共にA村に出かけていただろう。その後のことは想像するしかない。

わたしは月日を経た今も、なぜシャニフェ氏が地元住民に殺されなければならなかったかを問い続けている。この事件は一般的に密猟対策を厳格におこなう公園のスタッフと地域住民の対立が激化した結果として受け止められている。しかしその背景にはさまざまな要因がある。マゴ国立公園では、その事件が生じる数年前から欧米諸国の資金援助を得て密猟対策を強化していた。その対策のリーダーシップをとって

いたのがシャニフェ氏だった。彼は各行政区に公園の現状を報告し、警察と連携して密猟者を摘発することをすすめていた。トップダウンでおこなわれる密猟の取り締まりは、公園のスタッフに対する住民の憤懣を高めていた。もちろんこのこととシャニフェ氏が狙われたことを単純に関連づけるのには無理があるだろう。事件の真相を明らかにするためには、A村の住民の言い分はもちろんのこと、狩猟をめぐるA村の住民とスカウトとの間で何が起こっていたのか、シャニフェ氏やスカウトが密猟対策に奔走しなければならない状況に追い込まれていたのはなぜなのかなど、検討しなければならない課題は多い。

それにしても、私が調査をしていた別の村では、村人が公園の管理者側と比較的良好な関係を築いていたし、シャニフェ氏は管理官長には珍しくフィールドで過ごすことを厭わず、村人と話し合いを重ねることに尽力していた。公園と住民との関係は良くなっていると感じていた矢先に事件が起きたのである。いずれにせよ、わたしはこの事件によって、野生動物保護をめぐるさまざまな問題により多くのアクターがかかわっていること、より広範な対象を想定して研究をすすめなければならないことを痛感した。受賞の対象となった論文ではこのような状況を知りつつ、それでもなお、マゴ国立公園の将来像を描くうえで重要なポイントとなると思われる「住民主体の野生動物の保護」の可能性を探ることにしたのだ。

最後になるが、受賞の記念文としてこのような話を書くのがふさわしいのかどうかについて随分と悩んだ。しかしこれまでの研究をふり返り、次の研究をすすめていくうえで、シャニフェ氏の死に向き合うことが必要であると思った。わたしはこれまで研究に際して、地域住民の視点を取り入れることを大事にしてきた。野生動物の保護政策はいまなおトップダウンで決められることが多く、地域住民の意見が政策に反映されることが極端に少ないからだ。しかしその一方で、シャニフェ氏の事件のみならず、野生動物保護の現場で管理業務に直接携わる人々が地元住民と同じように多くの犠牲を払ってきた現実がある。現在、両者は「今の状況が変わる」ことを切に望んでいる。わたしは彼らの思いに共感しているし、そのためにわずかでもいいから貢献したいと強く思う。

本当に最後になりましたが、これまでわたしの研究に協力してくださったエチオピアのフィールドの人々や日本で親身になって助言をくださった諸先生、先輩、研究仲間に深く感謝いたします。この受賞をひとつの節目にして、気持ちを新たにして研究・実践に地道に取り組んでいきたいと思います。

(にしざき・のぶこ／福島大学)

# 2006年度日本ナイル・エチオピア学会高島賞



## 審査結果報告

〈受賞論文〉

西崎伸子

「住民主体の資源管理の形成とその持続のための条件を探る  
— エチオピア、マゴ国立公園の事例から」

(『環境社会学研究』第10号 2004年 89～102ページ)

〈参考論文〉

西崎伸子

「エチオピアの野生動物保護におけるコミュニティ・コンサベーションの形成」

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 博士学位論文 2004年)

### 講 評

アフリカにおける自然保護活動は、住民を排除して設定された国立公園や保護区の存在に象徴されるように、人々と自然資源の対立的関係を前提としてきた。1980年代の「開発」をめぐるパラダイムの変換をうけて、地域住民の参加によるコミュニティ・コンサベーションの理念が登場したが、資源を毀損せずに同時に住民の生活を持続的に発展させるという課題を達成するには困難が大きく、人道主義との葛藤が論じられることも多かった。その結果、地元住民が受ける被害を補償したり経済的代替物を提供するという発想が生まれ、実施されてきた。

このような時代背景のもとで西崎氏は、1996年以来、地域住民が主体となっておこなう自然資源の保護活動、すなわちコミュニティ・コンサベーションを対象とする研究に取り組んできた。また、海外青年協力隊員としての実践経験をふまえて地域住民の視点を研究に取り入れ、住民が直面する諸問題を主題化する努力を続けてきた。今回、高島賞の受賞対象とする論文は、西崎氏のこのような一連の研究・実践活動の成果である。

受賞対象論文は、住民主体の資源管理が持続的に形成・維持されてゆくための条件を、エチオピア南部諸民族州にあるマゴ国立公園の事例から探究したものである。この論文のなかで西崎氏は、国立公園の周辺に居住する地域住民がみずから公園自警団を結成し、密猟対策を開始した事例をとりあげて、以下のように分析している。すなわち、住民が自警団を結成した背景には、生業活動の一環として公園内で養蜂をおこなうことを強く望んでいた住民が、従来のゾーニング手法(囲い込みによる野生動物保護)に抵抗していたことや、また、野生動物の減少に対して住民自身が危機感をいだいていたという現実があった。そして自警団の組織と実践は、在来の狩猟活動をとおして住民同士のあいだに結ばれていた社会関係に支えられていた。そして自警団のメンバーは、「狩猟の自主規制」ともいふべき新たな規範が村落内で生まれる過程で中心的な役割を果たしたし、また、公園スタッフと地域住民の対立を緩和する役割も担っていた。ここでは、実質的な「住民主体の資源管理のしくみ」が形成されていたのである。

エチオピアにおいては、野生動物の保護をめぐる国家と地域住民のあいだに硬直した対立構造が存在することが指摘されているが、この論文で記述・分析された事例は、この対立をときほぐす手だてとして、行政と住民が資源の共同管理 (Collaborative management) をおこなうことが有効であることを示している。コミュニティ・コンサベーションを実現するためには、国家が排他的に保護区を設定・管理するという従来の方法を改め、コミュニティとの共同管理を試みるのが、もっとも現実的で有効な方法であると、西崎氏は結論している。

西崎氏は、2004 年 3 月に京都大学より博士 (地域研究) の学位を授与された学位論文「エチオピアの野生動物保護におけるコミュニティ・コンサベーションの形成」と、その内容を公表した一連の著作のなかで、一貫してエチオピアにおける野生動物保護区と地域住民の相互関係を記述・分析してきた。エチオピア南部のセンケレ自然保護区と地域住民アルシ・オロモの関係を検討した仕事では、国家による土地の囲い込み (保護区や国営農場の設立など) によって、祖先の歴史が刻み込まれた「広い土地」が地域住民から奪われたこと、そして、人と土地を切り離すような野生動物の保護政策に対して、人々がさまざまな方法で抵抗してきたことが詳細に記述されている。また、人々が「自分たちのものである」あるいは「大切である」と認識した水や土地などの自然資源に対しては、それを独自の方法で「管理」するしくみをつくりだしてきたことも明らかにされている。逆に、国家による土地の囲い込みは、人と土地の関係を分断しただけではなく、人と野生動物のかかわりを希薄化させた。その結果、野生動物保護を最優先する当局と、土地を必要とするコミュニティとの交渉は非常に困難なものになったと、西崎氏は指摘している。

過去 30 年のあいだに、2 回の政治体制の変化を経験したエチオピアでは、国家と地域住民のあいだの自然資源をめぐる諸関係もまた、大きく変化してきた。西崎氏の研究は、この過程を、主体となる地域住民の経験として記述・分析し、総合的に理解することを目指したものとして高く評価できる。また、記述・分析の対象となる利害関係者をひとまとめには扱わず、地域社会の個々の成員による立場の違いや、保護当局側の職分や出身など、個人的属性の差異を慎重に考慮に入れていることも大きな特徴である。そして西崎氏の研究は、エチオピアを含むアフリカ諸国における野生動物保護思想の歴史の変遷をふまえて、先行研究を広範に吟味し、長期のフィールドワークに基づく実証的資料を検討することによって、今後のコミュニティ・コンサベーションのあり方を探究した点で、非常に優れた研究である。

これまで、生物保全学や開発実践の実務者の立場からは、長期のフィールドワークを通じて地域住民の視点に立とうとする接近法は、問題の解決には役に立たないとしてあまり評価されてこなかった。しかし西崎氏は、国家と地域住民との交渉の過程や地域住民の経験を長期間にわたるフィールドワークによって調査し、両者のあいだに歩み寄りの契機が生まれること、そしてそれが住民主体のコミュニティ・コンサベーションへと発展する可能性があることを明らかにした。この研究成果は、自然資源の保護という現代的で普遍的な課題を考究する地域研究に、新しい地平を拓く成果として高く評価されるべきものと考えられる。

以上の理由から西崎氏の論文を、ナイル・エチオピア地域における学術研究に多大な貢献をもたらした業績であると評価し、2006 年度の高島賞受賞にふさわしいと判断する。

2006 年 4 月 10 日

選考委員会

太田 至 (委員長)

庄武孝義

仲谷英夫